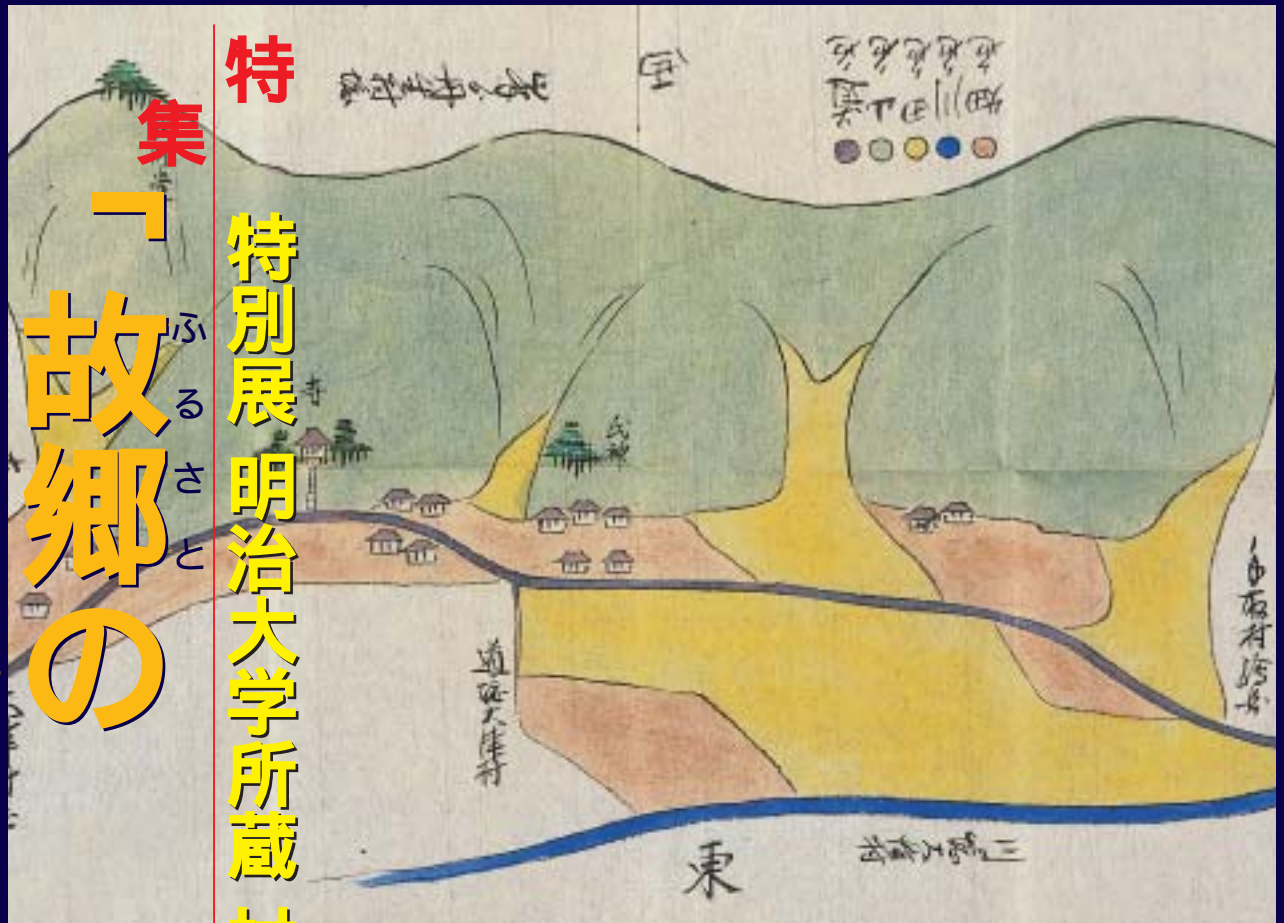


ミュージアム・アイズ

# MUSEUM EYES

Vol. 49  
2007

Mm  
MEIJI UNIVERSITY  
MUSEUM



特

集

故郷の

特別展 明治大学所蔵 村絵図の世界

原風景を歩く

博物館ニュース

展示&リサーチ「漆・新世紀」

「ヒトは環境にどう適応したか」

市民レクチャー「黒耀石と考古学(1)」

学芸研究室から「列島旧石器時代の住まいをめぐる  
諸問題」

収蔵室から「泥面子」

M2カタログ

入館者数の動き・団体見学の記録・アンケートから  
博物館友の会から

明治大学博物館

ふるさと  
故郷の  
原風景を歩く

明治大学所蔵 村絵図の世界

前期 2007年9月14日(金)14:00開場 ~ 10月23日(火)

後期 2007年10月26日(金)~ 12月4日(火)

ふるさとの山と川、田んぼに畑、鎮守の杜に菩提寺。

遙かな時空を超え、我々の祖先が生きた農村の原風景を情感豊かに体感していただきます。

博物館が所蔵する膨大な古文書の中には、江戸時代の村の様子を描いた絵図面が多数含まれています。村絵図が作成された意図は様々ですが、今回の展示では、描かれた景観を通して江戸時代の「村」とは何かをご覧くださいとともに、まとまった数の絵図面が残存する3つの村を事例研究の対象とし、関連する古文書を合わせて、地域性豊かなその歴史を解き明かします。ここでは、その概略と見所をご紹介します。

村絵図を歩く

「村絵図をトレースし、それを手にして村を歩くと、過去と現在とがしだいに一体になってくる。村絵図はある場合には驚くべき変化を示し、他の場合には、数百年の歳月が停止しているような相似を示す。村絵図のわれわれにとっての意味は、それによってかつての村落景観が間違いなく眼前に浮かび上がるということ、つまり景観復原の最大の武器になるということである。」

(木村礎『村の語る日本の歴史』近世編 そしえて、1983年)



天明3年(1783)出羽国村山郡観音寺村絵図

現地踏査を重視し、村絵図を活用する近世村落史研究を、明治大学の木村研究室(故木村礎名誉教授の研究室)は生み出しました。観音寺村絵図は木村名誉教授が典型的な村絵図を紹介するために、ご著書『村の語る日本の歴史』の折込図版に使用されたという逸話を持つ絵図です。

第1部 江戸時代の農村景観

ここでは、村絵図を用いて江戸時代の村が持つ多様な側面を検証します。「村」の景観がどのように描かれているか、リアルな情景をご覧ください。

耕地 ~ 検地と村切り

農産物を生み出す田畑は、村人の生活を支える源であるとともに、領主の経済基盤でもありました。江戸時代の「村」は、領主が支配のために創出した性格を色濃く持つのです。

農村と水

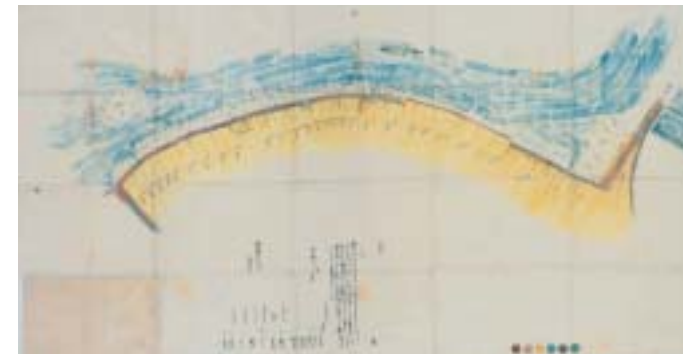
河川の治水工事と用水網の整備によって潤沢な農業用水が供給されるようになり、耕地の開発が飛躍的に進みました。同時に、水の利用と施設の管理が、人々の共同作業として生活上重要な要素となりました。

野と山

原野や山林は肥料や飼料となる下草や若芽の供給源でした。利害の発生する場でもあり、境界や利用慣行をめぐる争論(野論・山論)が発生しました。一方、時代が下るにつれて、野は開発の対象となってゆきました。

寺院と神社

人々の社会生活と深い関わりを持っていた寺院と神社。明治維新の折、変化を余儀なくされた前近代のその姿をご覧ください。



寛延2年(1749)武蔵国埼玉郡小林村堤通論所絵図



天和3年(1683)信濃国筑摩郡平田村他4ヶ村野論裁許絵図



天保8年(1837)下野国安蘇郡開馬村絵図

村の施設

法令を掲示して伝達した高札場や年貢米を貯蔵した郷蔵などの施設。

関連イベント

明治大学リパティ・アカデミー

オープン講座 特別展開催記念講座

明治大学と村落史研究

木村礎研究室 村落史研究の軌跡

門前博之(明治大学文学部教授)

村絵図と木村史学

吉田 優(明治大学文学部准教授)

日時 10月6日(土) 14:00~17:00(開場13:00)

会場 明治大学駿河台校舎/リパティタワー2F 1021教室

受講料 500円 要申込

リパティ・アカデミー会員、明治大学生、明治大学博物館友の会会員は無料

申込・問合せ先 明治大学リパティ・アカデミー事務局 TEL.03-3296-4423

博物館公開講座

景観から読み解く江戸時代の村

日時 10月17日~11月21日

毎週水曜15:00~16:30 全6回

受講料 9,000円 要申込

受講にはリパティ・アカデミーへの入会が必要です

講師 森 朋久(明治大学農学部兼任講師)

原 和之(伊勢原市文化財課)

外山 徹(明治大学博物館学芸員)

## 第II部 村絵図に刻まれた地域の歴史

村絵図を効果的な歴史資料として活用する上で、文献史料（古文書）の解読や現地の踏査は不可欠です。ここでは、関連の古文書や現地の写真、地形図を交え、絵図に描かれた景観を地域の歴史として読み解きます。

### 出羽国村山郡山口村

（現山形県天童市）

山間の扇状地という水に乏しい立地に制約されながら、人々はどのようにに耕地を切り拓いたか。谷田の開発から、大規模貯水池の造成による耕地の開発まで。他に山林資源の利用慣行、水害による被災と復興など。



（近世後期）山口村耕地仕込絵図

### 相模国足柄上郡千津島村

（現神奈川県南足柄市）

小田原藩大久保家の治水工事によって生み出された酒匂川右岸の沃野。広大な耕地は宝永4年（1707）の富士山噴火と、それに続く大水害によって壊滅します。半世紀を超える歳月を要した復興への過程を絵図から探ります。



（近世前期）相模国足柄上郡斑目村絵図



延享2年（1745）千津島村地押絵図（部分）



宝暦10年（1760）千木良村絵図

### 相模国津久井郡千木良村

（現神奈川県相模原市相模湖町地域自治区）

相模国の最奥に位置する山村は、甲州道中と相模川という経済の動脈の至近に立地していました。典型的な村絵図を複数年代にわたって定点観測し、山村の暮らしに迫ります。

## 関連イベント

### ギャラリー・トーク

日時 / 木曜 9/27 10/11 10/25 11/15 11/29 15:00~16:00  
講師 / 外山 徹（展示担当学芸員）  
定員 / 20名  
参加費 / 無料 先着順・申込不要

展示解説と絵図に描かれた故地の現地映像の紹介。

### 子ども体験教室 村絵図を描いてみよう

日時 / 11月3日（土） 13:00~15:00  
定員 / 15組（原則として親子で参加）  
参加費 / 500円 要申込

村絵図を題材にオリジナルの絵地図を制作します。

申込・問合せ先 明治大学博物館 TEL.03-3296-4448 FAX.03-3296-4365

## 博物館ニュース

### 来館15万人達成！！

去る2007年5月16日、2004年4月のリニューアルオープンの日からの累計来館者数が15万人に至りました。

記念すべき15万人目となったのは、山形県中山町立中山中学校の皆さんでした。セレモニーでは杉原館長より記念品が贈呈され、記憶に残る良き旅の思い出になったことでしょう。

明治大学博物館はこれからも皆様に何度でも足を運んでいただけるような、魅力ある博物館づくりを目指して、スタッフ一同努力していきたいと思っております。ご来館ありがとうございました！！



中山中学校の生徒の皆さん。博物館スタッフとともに

### 2007年度春季特別展

#### 「ガウランド 日本考古学の父」を開催しました

5月19日から7月1日まで、明治期に日本の古墳を研究したお雇い外国人技師のウィリアム・ガウランドに焦点を当てた春季特別展を開催しました。展示ではガウランドが撮影した当時の古墳の写真のほか、造幣博物館所蔵の直筆文書や、ガウランドがかつて撮影した東京国立博物館所蔵の陶棺（岡山県本坊山古墳出土）など約110点の貴重な資料が一堂に会しました。

会期中は考古学に興味がある一般の方や研究者、学生のほか、ガウランドが手がけた登山や冶金学に関心のある方々なども訪れ、入場者数は予想を30%も上回る3,990名にも及びました。学史上重要とされながら、これまで知られてこなかったガウランドの功績を広く周知することができたという点で、大変意義深い特別展となりました。



5月18日に行われた開幕記念式典の様子

### 明大生と博物館の共同企画

#### 「高札 - 支配のかたち - 」展

去る8月22日（水）から9月3日（月）明治大学博物館では高札（木の板に法令を記し、民衆に掲示したもの）の展示を行いました。この展示は、博物館側の「日本史や博物館に興味のある学生と一緒に展示をしてみませんか」という投げかけに手を挙げてくれた17名の学生と共に、作り上げたものです。

第1回の説明会を行ったのが、6月の半ば。コーナー展示班を3班、広報班を1班作り、開催までの2ヶ月余りの期間、学生達も忙しい授業の合間をぬって準備活動を行いました。収蔵庫に保管されている史料を読み込みながら、展示の内容をどうするか、何を出展するか、皆で額を寄せ合わせて相談しました。さらに、一人でも多くの人に展示を見てもらおうと、広報にも力を入れました。ポスターにつかう史料を皆で相談し、デザインが得意な人が広報担当者となって様々な広報物を作成しました。学生達にとっては、企画段階から展示に関わるのは初めての経験でしたが、自分から案を出したり、学生同士で意見を交わしたり、積極的に企画を作り上げていきました。

全てが手作りの展示会は、前々日、前日の怒濤の展示品の列品作業を乗り越えて、8月22日に感動のオープンを迎えました。13日という短い会期でしたが、期間中には学生実行委員会によるギャラリートークも行われ、大成功の内に閉幕しました。



学生実行委員会：  
佐藤顕、鈴木拳、岡野樹明、森優次、石橋星志、阿部靖子、大塚洋平、中村舞、倪穎嘉、塩原菜穂、鈴木友記、吉田悠希、田中千尋、岡庭亜紀子、小林みちる、丹生瑛子、関沢夏佳  
博物館スタッフ：  
日比佳代子、竹原万雄、渡辺美知代

#### 「高札 支配のかたち」展 展示内容

全国有数の規模を誇る明大高札コレクションをもとに、目に見える「支配のかたち」としての高札の役割を再現します。

- 【1.高札とは何か】高札には、人々に法令の内容を知らせるに止まらない役割がありました。支配者が込めたその役割について展示しました。
- 【2.領主支配と高札】大名の所替えや藩主代替りなどの際、高札がどの様に扱われたのか。支配刷新の象徴としての高札の姿を描きました。
- 【3.幕末の動乱と高札】天狗党の乱と戊辰戦争の際に出された高札を展示し、幕末維新の動乱期の高札がどのようなものだったかを紹介しました。
- 【4.高札の終焉】高札は、明治6年に取り外される事となりました。教科書でもおなじみの「五榜の掲示」を始め、終焉を迎えるまでに出された明治期の高札を展示しました。
- 【5.さまざまな高札】本館では、内容や発給者はもちろん形態面でもさまざまなタイプの高札を所蔵しています。その中でも興味深い特徴を持つものを選び、展示しました。

#### 「高札 支配のかたち」展 広報活動

ポスター・ポストカード・ホームページといった広報物から、看板やパネル・展示目録などの展示室内のデザインまで、博物館に来る前から実際に展示を見終わるまでを、連続した空間として演出しました。

# 「漆・新世紀」

## 最新テクノロジーによる次世代機能材料「漆」の研究開発

宮腰 哲雄 (理工学部教授)

### はじめに

「漆」は古くから用いられてきた天然塗料であり、その塗膜は艶があり優雅で美しく、器物の装飾材料としても重宝されてきた。ウルシの木は日本や中国をはじめ、東アジア・東南アジア各地に生育しており、その樹液である漆液は空気に触れるとゆっくりと硬化してゆく性質を持っている。

漆に関わる化学は、石油などの化石資源に依存しない天然材料によるモノ作りや、自然の循環サイクルを見習ったモノ作り、いわゆるグリーンケミストリー (Green Chemistry: 環境に優しい化学) やサステナブルケミストリー (Sustainable Chemistry: 持続可能な社会を目指すための化学) として注目されている。

漆は「木を育てて資源を得る」という栽培型の材料である。漆液中のラッカーゼ酵素により重合が進む特異な高分子材料であり、有機溶媒を含まない塗料なので環境保護やエネルギーの有効利用の観点からも、ますます重要な高分子材料、グリーンポリマーであると認識されてきた。

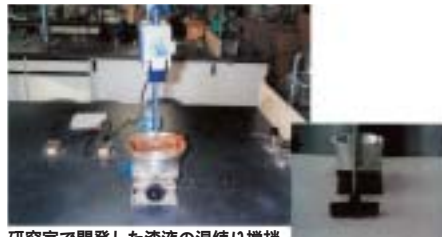
そこで我々の研究室では、漆の伝統的な利用方法を検討しながら、化学の新しい考え方や技術を導入することで、漆の新たな利用法を研究してきた。その結果「ハイブリッド漆」、「金コロイド漆」、「銀コロイド漆」、「蒔絵技法を応用したインクジェットプリント」、「漆を用いたクロムフリーの金属防錆法」などを開発した。漆の研究で得られた新規な漆、新しい技術、知見を用いて漆の試作品を作り、最新の漆の研究結果として展示・紹介する新しい試みとして「漆・新世紀」と題する展示会を明治大学博物館で開催していただいた。ここでは、それらの展示内容を紹介しますとともに漆に関連した研究活動や成果に付いて解説する。



漆液採取の様子

### 1 漆の特性

漆科植物の学名はAnacardiaceaeといい、そのなかの漆属はRhusと呼ばれ、日本では6種類知られている。そのなかで漆液の採れるのがウルシの木Rhus vernicifluaである。漆液の成分組成はウルシの種類、産地及び季節により異なるが日本産漆液には、脂質のウルシオール(60~65%)、水(25~30%)、水溶性成分としてゴム質(多糖)(5~7%)、ラッカーゼ酵素(0.1%程度)それに水にも有機溶媒にも溶けない含窒素物(糖タンパク)(3~5%)が含まれていてW/O型(油中水球型)エマルジョンを構成している。



研究室で開発した漆液の混練り攪拌装置 (ニードルミキサー)

漆の木から得られた樹液をろ過したものが生漆であり、これは漆工芸品の下地、蝋色塗りの摺漆及び拭き漆の工程に使われる。生漆は水分が25~30%と多く、乳白色~薄褐色をしていて油中水球型エマルジョンを形成し、顕微鏡で観察すると比較的大きな粒子径(10μm程度)をしていることが分かる。そこで生漆を混練り攪拌してエマルジョンを分散処理して多い水分を蒸発させて3~5%にすると漆液は透明性のある濃色に変わる。この工程を「なやし」(混練り攪拌工程)と「くろめ」(黒目) (加温脱水工程)といい、この精製工程を経て漆は塗料化される。これにより得られる漆は精製漆(あるいは素黒目漆)と呼ばれ、この漆は上塗り用の塗料に使われる。この漆液を顕微鏡で観察すると粒子は(1μm程度)に細かく分散されているためW/O型エマルジョンの状態は観察されない。

漆液は高湿度下で乾燥(硬化)する特異な塗料である。漆を塗布した器物を湿度70%RH、温度20~25度の「漆室」と呼ばれる乾燥器の中に置くと、ゆっくりと酸化反応が進み5~8時間かか

て乾燥する。

漆の乾燥は、漆膜に息を吹きかけ曇りを生じる状態が結露乾燥(Dust free dring:DF)、指先で軽く触れてべとつかない段階が指触乾燥(touch free dry:TF)であるが、まだ乾燥は充分ではなく強く押すと指の跡が付く。さらに酸化が進んで塗膜が乾燥した段階が硬化(hardening dry:HD)である。この各時点を漆液の乾燥時間として記録する。これを乾燥時間測定装置で自動的に調べることもできる。ガラス板に漆を薄く塗って、装置にセットし、測定用針で漆液表面に引っ掻き傷を付け、それを追いかけることにより、漆液から乾燥硬化した塗膜へと変化する乾燥状態の変化(DF、TF、HD)や乾燥過程を観察することができる。

漆は高湿度においてラッカーゼ酵素により乾燥するが、その乾燥速度はいちじるしく遅く、作業上、温度・湿度の管理に細心の注意を払う必要がある。このことが、漆を工業的な塗装に応用する際の大きな障害になっている。そのため、漆の乾燥促進法に関してはさまざまな検討が行われてきたが、まだ本質的な改質に至っていない。そこで我々も漆液の乾燥性を向上させる研究を行った。

### 2 ハイブリッド漆の開発

常温乾燥(硬化)型の合成樹脂塗料は塗膜形成成分(油性ビヒクル) 顔料、乾燥剤(硬化剤)、分散剤、有機溶媒などからなり、これらを混合して流動性を持たせてある。このような塗料を薄膜にして塗ると有機溶媒が揮発して、湿度に関係なく常温で乾燥する。しかし漆液は有機溶媒を含まず、湿度の高い特異な環境条件下で乾燥する。漆を塗布した器物を湿度70%RH、温度20~25度の漆室と呼ばれる恒温恒湿乾燥器の中に置くと、漆はラッカーゼ酵素による酸化反応がゆっくり進み、だいたい一晩かかって指触乾燥する。漆の指触乾燥は指先で漆の塗布面に軽く触れてべとつかない程度に塗膜表面が乾燥した段階であるがまだ塗膜は十分に乾燥していないので強く押すと指の跡が付く。その後更に酸化反応が進んで塗膜が乾燥した段階が硬化である。

我々は、有機ケイ素化合物が漆液とただちに反応する特性を利用して、「ハイブリッド漆」と呼ぶ速乾性漆を開発した。これは、ウルシオールの酵素重合の進行とともに有機ケイ素化合物を5%程度添加することで、ウルシオールの抗酸化性を低下させて自動酸化が促進され、比較的低い湿度下でも早く乾燥する塗料になる。ハイブリッド塗膜は、漆塗膜の特徴を維持しながら硬度が上昇することや、多様な彩色漆にも応用可能なことから、現在、漆塗装の現場で種々の利用法が検討されている。

### 3 ワインレッド様色調の漆塗料の開発

漆の塗りものの評価とイメージは艶のある美しさや高級感にあるといわれている。艶は単に光沢が高だけでなく深み感と鮮映性を伴う感性が関わっていて、漆塗膜はふっくらした肉持ち感を有する凸面の塗膜構造を持っている。漆膜の特異な漆艶は漆液の複合的な成分組成と塗膜の粒子構造に起因し、肉持ち感はウルシオールの凝集力や表面張力の大きさが関係している。またウルシオールオリゴマーの屈折率が大きいことも深み感と関係していると考えられるが、まだそれらの物性との関連は明確でない。

漆塗りにはいろいろな漆が使われている。生漆は漆工芸品の下地工程、蝋色仕上げ磨きの工程に用いられ、また摺漆や拭き漆にも使われる。精製漆には多くの種類があるが、大別すると透漆と黒漆がある。透漆は生漆を「なやし」と「くろめ」を行った透明度の良い精製漆であり、これに顔料を練り込むと彩漆になる。黒漆は生漆に鉄粉あるいは酸化第一鉄の水溶液を混ぜてウルシオールと鉄を反応させて「なやし」と「くろめ」を経て作る。これはウルシオールと鉄イオンのキレート生成を伴う発色である。

漆膜に光沢や艶を出して乾くようにアマニ油や荏油などの乾性油を加える有油漆があり、これは塗り立て用の漆に用いられる。一方、油を添加しないでくろめだけの無油漆は艶や光沢を押さえた漆特有の漆艶を有する塗り肌になり、蝋色仕上げに用いられる。

漆の色は黒と朱だけでなく、明るい朱から、濃い朱、茶色、オレンジがあり、また緑色、青色、ピンク、白色(アイボリー)といろいろな色のバリエーションがある。これは漆が良好なバインダーになり各種顔料を高い濃度で分散安定化させ、いろいろな素地と結着する性質があるためである。また彩漆は延展性が高く肉持ちがよく、細く長い線が描ける。そのためアイデアやデザインの多様性と漆の特性を活かして美しい工芸品を作る材料になっている。

春慶塗りは、美しい木目を装飾として生かすために無着色の漆を塗って仕上げる技法である。ハイブリッド漆液に金コロイドを添加してワインレッド(紅色)様色調の漆塗膜を調製する研究開発を行った。一般に、漆の塗膜は高い湿度のもとで乾燥させると茶褐色から黒褐色になるが、比較的湿度の低い環境でゆっくりと乾燥させた塗膜は、透けのよい淡黄褐色になる。このような乾燥条件下で、深紅の金コロイドを添加したハイブリッド漆からワインレッド系統の色調の漆塗膜が得られる。従来、赤系統の色漆として



金コロイドおよび銀コロイドで塗装した漆器の試作品

は、水銀朱を用いた朱漆やベンガラ(酸化鉄(III))を添加したベンガラ漆があったが、金コロイドを添加することでワインレッドを呈する新しい色調の漆塗膜になった。金コロイドの代わりに黄色の銀コロイドを用いると、淡黄色の春慶塗調の塗膜が得られる。これらについては、現在、漆塗装の現場で種々の漆塗り見本が作られ、製品化が検討されている。

### 4 蒔絵を身近なものにする

ナノ漆によるインクジェットプリント  
天然塗料である漆の樹液は、油中水球型エマルジョンで、その乾燥硬化した塗膜は粒子構造である。このような漆液を、ニードルミキサーなどの分散装置で混練り攪拌して微粒化することでナノサイズの漆液を調製した。このような漆液から得られる塗膜は高光沢度、高硬度、耐水性や耐光性が高い性質を有している。このような特性を有するナノ漆を用いた種々の漆塗り見本が作られ、製品化が検討されている。



ナノ漆と素黒目漆を用いた漆塗り見本

また、漆液は金粉あるいは金箔の箔張り剤としても用いられる。接着用の漆の上から金粉を蒔いて絵柄を表現する加飾技法が「蒔絵」である。このような技法を応用し、コンピュータ上の文字データや画像データを、インクジェットプリンターで微粒化分散したナノ漆を用いて文字や絵を施し、その上に金粉や金箔を貼ることで蒔絵風の漆塗り印刷が可能になった。これは、漆液を微粒化分散してナノ化することによって可能になった技術である。



インクジェットプリンターを用いた「蓮蒔絵」



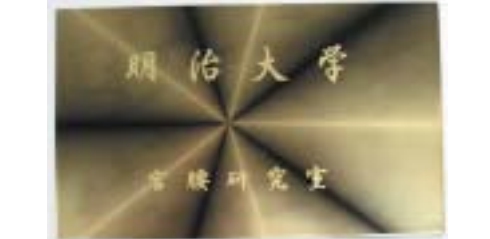
インクジェットプリンターを用いた蒔絵「文殊菩薩像」

### 5 漆を用いた金属防錆法

近年、環境や安全に関わる問題として、重金属類の使用が規制されている。その中でも、鉄

鋼材の防錆に使われてきたクロムの問題がある。現在、クロムを用いない「クロムフリー」の新しい防錆法の開発が望まれている。我々は、この問題を解決するために、ハイブリッド漆を用いたクロムフリーの防錆塗料の開発について研究した。

漆は強い耐久性・耐薬品性があり、また金属と密着がよいことから、鉄鋼製のボルト、ナット、金属プレートの防錆法を検討した。その結果、塩水噴霧試験で1000時間を超える耐食性能があることが分かった。



インクジェットプリンターを用いた印字

### おわりに

漆の関わる化学は、石油などの化石資源に依存しないもの作りや、天然材料や自然のサイクルを見習ったもの作りに関連して、再び見直されている。漆は天然資源であり、木を育てて資源を得る、いわゆる栽培型の材料である。そのほか酵素により重合が進む高分子化合物であり、有機溶媒を含まない塗料で、環境保護、エネルギーの有効利用の観点からますます重要な高分子材料であると認識されてきた。漆は万能の塗料、接着剤といわれた時代があったが、それは漆の持つ特異な性質に由来する。主要な生産国である中国では木工製品の塗装のみならず、防錆剤、防腐剤、耐熱材料など多方面に使用されているという。

天然資源である漆を生活用品や美術工芸品の塗料として使うだけでなく、漆の特性を活かして新しい塗料や接着剤に使用することや工業用塗料材に使うことで、伝統と歴史のある漆が今後も更に活用され、用途が拡大し、次世代の植物由来の機能性材料になることを望む。

### 謝辞

このように漆に関わる最近の研究結果を展示・解説した「漆・新世紀」展は、明治大学社会連携促進知財本部の主催で、NEDO(新エネルギー・産業技術総合開発機構)と株式会社小野屋漆器店に後援していただき、本学博物館の特別展示室で2007年4月7日から5月7日まで開催された。

展示会の開催は本学博物館の皆様のご理解とご支援のもとで行われました。本紙面を借りて深く御礼を申し上げます。また開催の準備および期間中、本学応用化学科宮腰研究室の学生諸君に多大なご協力とご支援をいただきました。学生諸君のご助力に感謝します。

本研究の一部はNEDOの大学発事業創出実用化研究開発事業(マッチングファンド)に採択された研究開発の課題であり、株式会社小野屋漆器店との共同研究の成果です。ここに記して謝意を申し上げます。

# ヒトは環境に ヒトは環境にどう適応したか したか

阿部 芳郎 (文学部教授)



土からのメッセージ

“生”は草木が土上に生え出ることが字源。新しい生命が生まれ、生き、生かし、そして環ることを意とした字

## 縄文後・晩期の地域と社会

文部科学省によって採択された高度研究推進事業「学術フロンティア」が「環境変遷史と人類活動に関する学際的研究」(研究代表者杉原重夫)というテーマで2006年からスタートした。

このプロジェクトの最大の特徴は、一言でいえば「先進性と柔軟性」。研究に参加している研究推進員が学内外をふくめて30人あまり。考古学、生態学、地質、火山灰学、有機化学、無機化学、年代学、博物館学とバラエティーに富んでいる。

研究環境を創造する

研究の組織は古環境復元、遺跡調査、出土遺物の理化学分析、成果の展示公開の4部門から構

成されているが、多彩な顔ぶれは自分の箱庭にとどまらず、遺跡の発掘現場で融合し、遺跡の中から様々な情報を回収し、お互いの土俵を越えて議論する。分析資料は必ず自分で採取するのがモットー。他人まかせにできない参加者は、学生とともに作業に励む。遺跡が研究室に早代わりする瞬間だ。

フロンティアの第1の特徴は学生が横断的な研究をできる環境を作り出すことである。しかし、さほどの苦労もなく、現場での一体感で自然に学生の眼は輝きを増す。

考古学者が遺跡から出るとき

2つ目は、研究対象に応じた自在な連携関係を構築することである。固定的な思考の枠組みはこれまで考古学者を遺跡という空間に閉じ込めてきた。遺跡は複雑な情報構造体である。その成り立ちを理解するためには、人類が残したモノだけでなく、遺跡外の調査がとて重要である。考古学者も他の分野の研究者と連携し遺跡という枠組みから飛び出してものを考える時代が到来した。

連動企画展「縄文後晩期の地域と社会」本プロジェクトでは研究の成果を広く公開するために、7月22日に成果公開シンポジウム「縄文後晩期の地域と社会」を計画し、さらに連動企画展として「縄文後晩期の地域と社会」を明治大学博物館において開催した。現在推進中のテ

ーマは人類の寒冷化に対する適応形態の解明である。

それは今から3500年ほど前に降に起こる大自然のイベントである。海水面の低下、植生の変化、多雨化などによって引き起こされる自然界の連鎖的な現象が、縄文社会に与えた影響は小さくはないはずだ。

変容する地域社会の実像とは

研究対象としている地域は千葉県の内陸部にある印旛沼周辺である。この地域には縄文時代後期から晩期、そして一部では弥生時代初頭の貝塚が残されている。

この地域には縄文時代後期以来、長期間にわたり継続したムラが群集して、寒冷化をむかえた地域社会をかたち作っていたことがわかりつつある。しかし、こうした状況は晩期後半に一変する。それまでは多くのムラが群集したこの地域の遺跡は激減するのだ。

それでは人々はいったいどこにいったのか。この疑問は永らく考古学の大問題とされてきた。しかし、環境史はいま、現在の水田や台地の直下に水位の低下や土砂流出により出来た森が埋もれていることを明らかにしつつある。やはり答えは足元の地中にあるようだ。

青々とした緑の里山だけが彼らの生活の舞台ではなかったようだ。プロジェクトに参加する研究者たちは今、様々な手法で地中から寒冷化と人類史の記憶を聞きだそうとしている。

## 寒冷化に適応した 石器時代の社会にせまる - 台方花輪貝塚を掘る -

台方花輪貝塚とは？

台方花輪貝塚は、千葉県の中央部にある印旛沼の東岸に立地する縄文時代晩期から弥生時代初頭の遺跡である。この遺跡には、低地に向かう斜面と台地上それぞれに貝塚がある。その時期は、縄文時代晩期終末の荒海式土器の時期である。縄文時代晩期は、遺跡数が減少していく時期であり、荒海式期の貝塚は発見例が極めて少ない。そのため台方花輪貝塚のような遺跡は極めて貴重である。今までは不明な部分が多かった、縄文時代の終わりから弥生時代のはじまりまでの知られざる生活の実態を解明することができるに違いないからだ。また、この時期は地球規模の寒冷化が進む時である。こうした環境の激変に縄文人がどのように適応していったのかを知る手立てとなるだろう。

発掘調査の記録

### 3/16 発掘調査はじまる

先発部隊による調査区設定がおこなわれ、台地下の斜面にある貝塚に設定した調査区では早稲田大学の金子浩昌氏による調査坑跡を確認した。当時の発掘では、荒海式土器が東海地方の水神平式とともに出土している。

### 3/20 荒海式の貝層が台地上にも!?

学部生たちも合流し、調査が本格化する。台地上では、貝塚の調査が進み荒海式土器を貝層中から発見し、その下の土層からイノシシの下顎骨を検出した。

斜面では、貝塚の広がりや周辺の土層の堆積状況を確認するため複数の調査区を設けた。

### 3/21 遺構の発見か?

斜面にある貝塚周辺の平坦部では、焼土が確認され、生活面の可能性があると期待が高まる。



遺跡を見守る石碑(小川家建立) (前列 石碑左側 小川きよ子氏と良子氏)

この日を含む、調査期間中には様々な見学者が遺跡を訪れた。台方花輪貝塚を発掘された金子浩昌、馬目順一の両先生がご来跡され、かつ当時の調査状況を伺った。

### 3/22 調査もいよいよ大詰め!

台地上では、晩期終末の朱塗りの小型壺がイノシシの下顎骨とともに出土した。

斜面では、現在の斜面以上に急な角度で堆積した貝層の下に東北地方縄文時代晩期後葉の大洞A式をとともう獣骨が多量に出土する層が検出された。

### 3/23 調査終了

今回の調査を期して調査区を埋め戻す。わずか5日間の調査であったが、その成果は非常に大きいものであった。台地上の貝塚と台地下の斜面の貝塚の時期が同一であることや当時の人々の生活域に関する疑問。多量に出土した

獣骨の意味など多くの課題も得られた。夏の調査をどのようにおこなうか慎重な検討が必要である。様々な研究者の方に協力をしてもらいながらこれから縄文時代の寒冷期の生活を解き明かしていく。

参加者の声

はじめての発掘でしたが、いきなり多量の獣骨と遭遇しました。さらに、文献だけではなく実物にふれあう機会も多く、大変勉強になりました。

発掘に行く前に、本で勉強した荒海式や大洞式が本当に目の前に現れたときは、考古学ってこういうところで惹かれることだと感動しました。次の発掘では、もっと感動できるよう勉強しようと思います。(鄭貞愛)

今回の発掘は、初めて縄文時代の遺跡の発掘に参加する、ということで、非常に大きな期待の中で臨みました。時間があっという間に過ぎてしまい、あまり役に立てたとは思いませんが、とても勉強になり、また楽しい発掘でした。(西川春菜)

台方花輪貝塚を発掘すると決まり、何度か目印となる石碑を頼りに遺跡を訪れた。後にこの石碑が地主の小川さんが建立したことを聞き、感動した。先人の発掘成果を大切に継承され人類史上重要なものだろうと考え土地を守っていたのだ。このようなすばらしい遺跡を発掘できるとは光栄である。発掘成果もすばらしく、晩期終末の極めて稀な遺跡であることもわかり今後の分析などが楽しみである。次の調査では何が解明できるのか、どんな新しい疑問が出てくるのか今から楽しみで仕方がない。(吉川侑)



ヤマトシジミの貝層と多量に発見された獣骨



成果公開シンポジウム会場風景



連動の企画展「縄文後晩期の地域と社会」

# 黒耀石と考古学 (1)

安蒜 政雄 (文学部教授)

私たちは、20年余にわたる黒耀石原産地遺跡群の調査をへて、いま黒耀石考古学という、旧石器時代研究の新たな枠組みを構築している。以下に、黒耀石考古学の実践が旧石器時代研究の今後の方向性とどのように結びついてくるのか、その実例の一つを提示してみたい。

## I 鷹山遺跡群調査の歩み

日本列島には、数多くの黒耀石原産地がある。なかでも、北海道の白滝、本州の中部高地、九州の腰岳は、石器時代に広域で利用された黒耀石の産出地として著名である。

私たちが、調査をつづけている鷹山遺跡群は、中部高地黒耀石原産地の一角、長野県小県郡長和町(旧長門町)の鷹山地区にある(写真・図)。鷹山地区は、山と峠で囲まれた小盆



写真 星箕峠からみた鷹山遺跡群

地で、中央を鷹山川が流れる。鷹山川の河床には礫化した大小の黒耀石が堆積しており、その川辺からも峠の一つ、星箕峠にかけて黒耀石の小礫が散布する。なぜ、黒耀石がそのような場所にあるのか。星箕峠周辺の山体に黒耀石が含まれていて、それが崩落し盆地へと流れ込んだと、地質学的に説明されている。だとすると、星箕峠のどこかに黒耀石の鉱脈があるはずだが、正確な位置は現在まだわかっていない。

さて、その鷹山川の流域には、石器作りが大規模におこなわれた旧石器時代の遺跡が密集している。これらの遺跡が発見され出したのは、半世紀前の1955年に遡る。やがて、1961年からは発掘が始まり、1986年と翌87年には、鷹山川流域の詳細な分布調査も実施された。以降、遺跡群全休の計画的な調査と保存・活用が進み、今日に至っている。

ところで、1986年の分布調査は星箕峠にもおよび、そこで自然の地形とはとても考えられない、一群の凹みと遭遇した。星箕峠に隣接する虫倉山の斜面約45,000m<sup>2</sup>に広がり、その数約200箇所。1991年になり、この標高1,500mを測る一帯が、縄文時代の黒耀石地下採掘鉱山で、まだ完全に埋もれ切れない状態に置かれている事実が判明した。

こうして、山地と盆地で構成された、鷹山遺跡群の歴史的な景観が明らかにされつつある。盆地は、旧石器時代人が鷹山川の流域で黒耀石の原石を拾い集め、大掛かりに石器を作った遺跡の密集地。山地は、縄文時代人が地下から黒耀石の原石を掘り出した鉱山。そしてさらに、2000年以降、山地の縄文鉱山跡からも旧石器時代の遺跡が発見されるようになり、注目を浴びている。というのも、地下資源を積極的に利用する鉱山の起源が、旧石器時代まで遡るのかどうかという、大きな問題と直結してくるからである。

## II 黒耀石考古学の構想と実践

以上のような、鷹山遺跡群の調査過程をふんで、私たちは、いま黒耀石考古学を構想し、その実践に努めている。では、黒耀石考古学とは何か。

旧石器時代人と縄文時代人とは、黒耀石との係わり方が極めて対照的。例えば、黒耀石を手に入れる方法一つを取り上げてみても、旧石器時代人は地表の目に見える原石を拾い集めたのに対し、縄文時代人は地下から原石を掘り出し始める。ここには、原石の地上採取から地下採掘へという、歴史を画する大きな変化がみられる。

つぎに、黒耀石の原産地でおこなわれた石器作りの様子を見比べてみよう。旧石器時代は、原石の拾い集めと石器作りとが一体化している。だが、縄文時代の鉱山は、あくまでも原石の採掘場であり、その場で石器は作られていない。したがって、鉱山活動は、原石の大量入手とその流通を目的としていたと考

えてよい。鉱山の出現は、石器時代の経済が自給自足から物々交換へと進展した確かな証拠でもあった。

以上二つの事象をとってみても、旧石器時代から縄文時代へと移り変わる、歴史的な転換を目の当たりにできる。そればかりか、鷹山遺跡群をはじめとする黒耀石原産地遺跡群には、石器時代人が黒耀石と係わり合ってきた歴史の経緯を示す様々な出来事が残されている。そうした事例を列挙していくと、日本列島の石器時代史を綴れるほどである。つまり、黒耀石による石器時代人類史の構成が可能となってくる。これが、黒耀石考古学を構想した出発点であり、黒耀石考古学が成り立つ大きな基盤でもある。

しかも、黒耀石が独自に日本列島の石器時代人類史を構成できるとなると、黒耀石は石器時代の研究の上で極めて重要な役割を果たすことになるだろう。というのは、これまでの石器時代人類史は、旧石器時代であれば石器、縄文時代になると土器というように、石器や土器の変化をもとに構成され叙述されてきた。それは、いわば石器考古学や土器考古学によって組み立てられた石器時代の人類史であった。黒耀石は、そうした日本列島の石器時代人類史を、傍証したり補完したりする役目を果たすのである。つまり、黒耀石考古学は、従来の石器時代史を検証する手段としても大きな存在意味をもって来る。

## III 黒耀石による石器時代人類史の構成

黒耀石考古学の枠組みは、黒耀石の産地が密集する日本列島内にとどまらず、広く東アジア一帯にも適用することができる。その一例を紹介してみよう。

後期旧石器時代の日本列島には、古い方から順に、ナイフ形石器文化と槍先形尖頭器文化それに細石器文化という三つの階梯が認められる。ただし、この三つの文化階梯は、本州の関東地方と中部地方を除くと、ほかの地域には当てはまらない。なぜなら、北海道にはナイフ形石器文化がなく、槍先形尖頭器文化もまた北海道と九州にはないことによる。これは、日本列島内に地域性が生まれていた証拠でもある。

一方、ナイフ形石器文化と細石器文化は、ともに前・中・後の三時期に分かれる。そして、ナイフ形石器文化の後期と細石器文化の前期とは時間的に重なってくる。それらを考慮すると、日本列島の旧石器時代は五つの時期(第I~V期)に分かれる。

そうした日本列島が、周辺の地域と明確なつながりを示すようになるのは、第III期を迎えてからのことである。この時期の日本列島に、剥片尖頭器と湧別系細石器が登場してくる。剥片尖頭器の分布は、中心が九州で、本州を北上し北海道に向かうにしたがって希薄

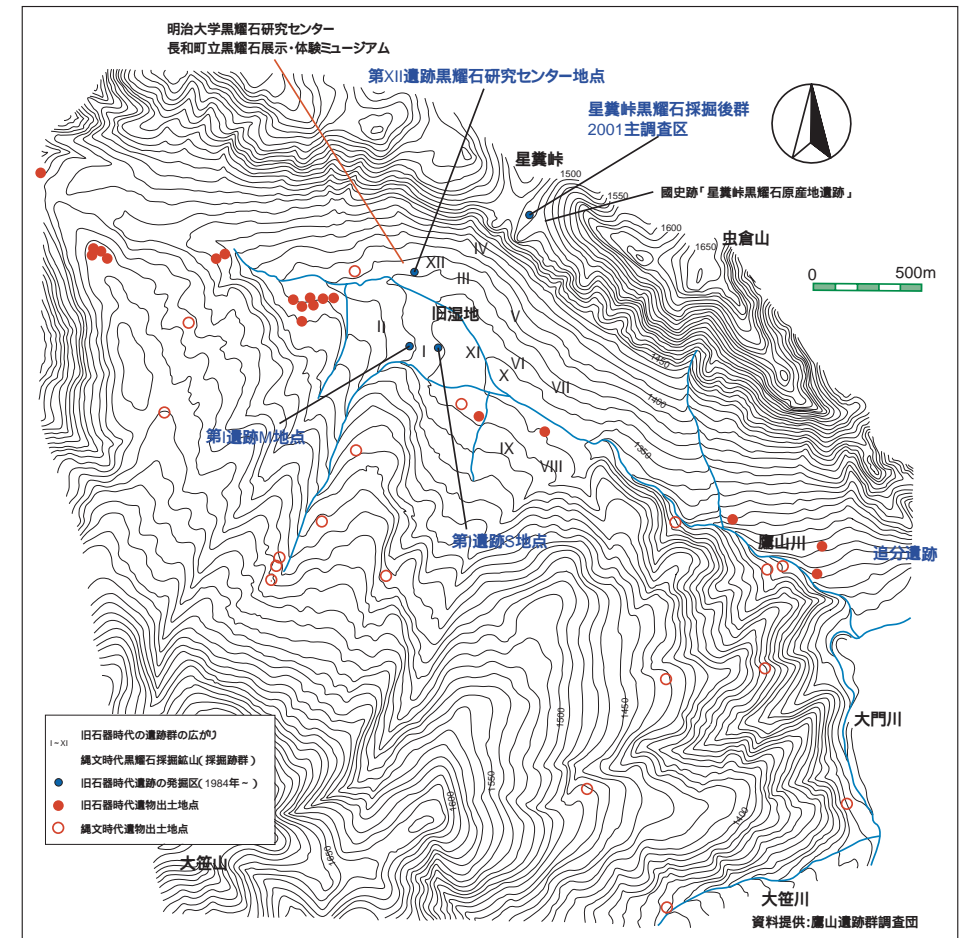


図 鷹山遺跡群の広がり

となる。逆に、湧別系細石器は、北海道に濃密で、本州を南下するにつれ分布が薄れる。両者は本州を共通項としながらも、九州と北海道というように、分布の中心は極めて対極的である。そのうえ、九州と北海道は、どちらも地理的に周辺の大陸や半島に近い位置を占めている。

そこで、周辺地域に目を向けると、剥片尖頭器は朝鮮半島の南部(韓国)に最も多くの遺跡が残されており、その分布は朝鮮半島の北部や沿海州にも点々とつづく。一方の湧別系細石器は、ロシアの沿海州から朝鮮半島へと分布が延びる。さて、この二つの分布を重ね合わせると、後期旧石器時代の東アジアに、あたかも日本海を巡ってヒトとモノが動いた回廊があったかのようなのである。

では、その回廊上、ヒトとモノは、一体どこを起点として動いたのか。剥片尖頭器はおそらく韓国に、湧別系細石器はシベリアの近辺に、その起点があったと推定される。ということになると、剥片尖頭器は韓国から日本列島へと左回りで伝播し、湧別系細石器は沿海州を経由して右回りで北海道に伝わり本州を南下したという、二通りのヒトとモノの動きが想定されてくる。

以上のように、周辺地域から日本列島へというかたちの、ヒトとモノの伝播・流入がと

らえられる。だが、ヒトとモノのどれもが周辺地域から日本列島へと動いたのか。そうとばかりはかぎらない

ここで、黒耀石考古学を援用してみよう。北海道産の黒耀石が沿海州へ、そして九州産の黒耀石が朝鮮半島へと、それぞれ渡った事例が指摘されている。日本列島を起点として、回廊を伝ったヒトとモノの動きもあったとみてよいだろう。

このように、黒耀石考古学は、従来の石器研究の成果から得られた一方向的なヒトとモノの流れを是正し補完する役割を担うことになるのである。そうした意味で、黒耀石考古学は、東アジアという広い視点にたつて、日本石器時代人類史を検証する能力をもっている。それだけではなく、黒耀石考古学は、従来の石器と土器が築いた研究の体系と並ぶ第三の存在として、今後大いに効力を発揮するに違いない。

(本稿は、『黒耀石文化研究』第4号の「日本列島の旧石器時代研究と黒耀石考古学」に加筆したものである)

# 列島旧石器時代の住まいをめぐる諸問題

## 1. 住まうことについて知らないこと

氷河紀を生き抜いた日本列島の旧石器時代人にとって、生存と密接に結びついた技術の一つは、間違いなく住まいの設営と利用だったに違いない。しかしながら、「住まい」そのものの証拠は、彼らの骨角利用や狩猟対象獣などとおなじく、少なくあいまいである。

列島旧石器時代の遺跡には、たいてい、ブロックと呼ばれる石器分布の集中部がいくつか残されている。ブロックの中身は、道具としての石器、それら道具を製作した際に飛び散った石くずである。その他によくみられるのは、焼けた石や破片がまとめおかれた礫群である。ブロックは、明らかに石器作りをした場所の痕跡であり、礫群は当時の厨房施設であると考えられている。しかし、柱穴などで示される上屋をもった住まいの場所を示すような痕跡は、遺跡にほとんど残されていない。では、住まいはどこにあったのか。

実はこの問題には対立し合う説があり、一定の見解が得られていない。どの遺跡でも、住まいの設営は行われていたのだろうか。私たちが旧石器時代の住まいを想像するとき、多くは骨組みをもったテント式の平地小屋を思い浮かべる。仮にそうだとすると、ブロックの全てが小屋掛けの覆いをともなっていたのだろうか。しかし、石くずが散らばるようなところで寝起きできるはずがない、という意見も根強い。また、住まいの部材は、持ち運び式なのか、あるいは現地調達式なのか。部材調達のための道具と、そもそも部材は何か。住まいに係る諸問題を議論するには、あまりにも証拠が少なすぎる。

## 2. 住居状遺構とブロック

列島旧石器時代における住まいの研究には、大きく二通りの見とおしがある。一つは、遺構としての住まいの復元である。柱穴や掘り込みをともなう遺構が発見されることがまれにあり、特に「住居状遺構」と呼ばれてい

る。これまでに全国で約30箇所の「住居状遺構」が発掘されている(吉田政行1998)。

ところが、これらの「遺構」を批判的に検討した栗島義明(1989)は、各地の「遺構」について、形態的特徴・遺物分布・土層堆積の観点から、多くの「遺構」は、遺構としての認定、あるいは旧石器時代への帰属に、懐疑的であると主張した。ただし、会田容弘(1992)は、だからといって「遺構」の本来の存在を否定することはできない、とも主張している。事実その後も、上屋構造や堅穴を示唆する「住居状遺構」は、新潟県荒屋、千葉県池花南、群馬県小暮東新山、神奈川県田名向原No.4地点、鹿児島県水迫などの各遺跡からみだされた。しかし、稲田孝司(2003)は水迫の「住居状遺構」について批判的検討を行っている。堆積土層と覆土、および遺物出土状況から、遺構は攪乱の誤認であり、遺物も遺構の内外に区分できず、住居遺構とする調査者の所見を退けているのである。このように、列島旧石器時代の「住居状遺構」は、発掘における検証という重い課題を課せられながら、発見と批判的検討の繰り返しの営みに晒されるよう運命づけられている。こうした事情もあって、各地にある「住居状遺構」の相互を比較して、住まいの変遷や地域性の枠組みを構築することは現状では無理であり、また、本来あったと思われる住まい一般のどの部分を、それらが反映しているのかもまだ分からない。

一方、田名向原No.4地点と小暮東新山の「住居状遺構」をブレイク・スルーとみなした安藤政雄(2000)は、「ブロックは、石器作りを分担した屋内作業場であるとともに、かたわらに分配された狩猟採集具を据え置いたイエの跡であった」と判断している。興味深い観点は、一連の石器作りを単位とするブロックの切り合い関係やブロックの重複が、あたかも縄文時代以降の堅穴式住居址のように存在していたことを示唆した点である。ただし、切り合い、あるいは重複するブロックを分離・抽出したうえで、前後関係の順番を決定できる石器研究法はまだ開発されていない。

## 島田和高(考古部門学芸員)

このように、住まうこと一般にかかわる技術の成り立ちを復元するための十分な資料的・方法的基盤を持たない現状ではあるが、住まいに関する上記した二つの観点から注目されるのが、神奈川県相模原市田名向原No.4住居状遺構(国史跡)である(図)。この「住居状遺構」は、柱穴・炉址・外周円礫によって住まいの上屋と範囲を想定させる「遺構」をともなう。ただし堅穴はない。まぎれもない「ブロック」である。

## 3. 田名向原No.4住居状遺構のブロックとその周辺

一見して分かるように、「住居状遺構ブロック」は、炉址を中心に柱穴と重なる一つのブロックをなしている。場所は、現相模川河床に接する低位段丘。石器組成では石槍が突出する。ナイフ形石器文化終末期の石器群である。島田和高(2004)は、「住居状遺構ブロック」では、黒耀石についていえば石核からはじまる剥片の打ち欠きはほとんど行われず、持ち込まれた多様な形の剥片からはじまる石槍の最終加工段階が、主に行われていたことを突き止めた。そのうえ、多数残されている石槍欠損品は、製作途上ではなく、いわば完成品の欠損品であるとも観察できた。

利用された石材をみると、黒耀石を主体(79%)として、硬質凝灰岩などの在地の石材が石槍や石くずとなって残されている。黒耀石の産地推定結果によれば、霧ヶ峰系・ハケ岳系・箱根系がともに認められ、高原山系が少数伴っている。要するに、一つのブロックにしかすぎない「住居状遺構ブロック」には、しかし、ありとあらゆる産地の黒耀石が、すべてひと揃いそろっているのである。とすれば、「住居状遺構ブロック」を構成する産地別の黒耀石製石器群および在地石材製石器群は、それぞれ独自の由来をもって住居状遺構の「なか」で重複しあっている単一的なブロックだった可能性がある。同じ時期の相模野台地全般に分布する遺跡の様子をみてみよう。

管見によれば、田名向原No.4地点の「住居状遺構ブロック」の石器群組成数は、1ブロックにもかかわらず同時期の相模野台地に数ある遺跡のなかで、最大規模である。また、黒耀石は信州系と箱根系が多用されているのだが、遺跡の個々のブロックでは、特定の産地別黒耀石が用いられるのが普通である。そして、島田(2006)は、当該期の信州系黒耀石をめぐる石器作りでは、南関東の外縁付近まで運搬されてきた未消費原石の受け渡しと受け取りではじまり、台地内の遺跡間で先送り消費。石核あたりのナイフ形石器の形態・規格が移ろう性格をもつが行われて、そのさなかに素材剥片を重点的に搬入しての石槍作りが行われる場所。田名向原住居状遺構ブロックなどで個々の黒耀石についての消費がかわる、と予測した。箱根系については十分に分析できていないが、当該期には信州系とともに、原産地からつながらる原石搬入の経路と消費のつながりが複数あったのは間違いない。そして、経路の違いには、単に産地の違いだけではなく、経路の利用可能時期、すなわち季節的な時間のずれがあったものと考えたい。そのずれが大きい場合、仕方がないので在地の非黒耀石石材を利用する機会が生じることになる。

## 4. 住まいの性格と機能について

そのように視野を広げて考えた場合、田名向原遺跡No.4地点の「住居状遺構ブロック」は、同時期の数ある遺跡とブロックとは、大きく性格が異なると思われる。この「住居状遺構ブロック」は、他の場所から石槍の素材剥片を運び入れる場所として、もっぱら利用されていた。その周辺には事実、素材作りを担ったと思われる多くのブロックが分布するが、黒耀石の産地構成は単純で、これらは季節的に設営され、すぐに放棄された普通のブロックだったのであろう。「住居状遺構ブロック」は、複数季節あるいは年をこえて重複していく。由来の異なる石材による時々々のブロックによって、地域的に最大の石器群規模となる。上屋構造、屋内炉、そして外周円礫は、その場所を回帰的に繰り返し利用することと強く関係があったと思われるのである。その設営された場所が相模川の河床間近であること、ブロックに壊れた石槍がたくさん残されていることを考え合わせると、これまでも幾人かの研究者が指摘しているように、「住居状遺構ブロック」の間近では、川魚を獲る仕事が集行的に行われていた公算が高い。ただし、土層がたびたび水の影響を

受けているからか、魚骨は出土していない。さらに想像を膨らませると、季節的に異なる種類の魚を獲るため、回帰的に利用されたのかもかもしれない。いずれにせよ、柱穴が残るほどに例外的な耐久性をもった「住居状遺構」は、決して寝起きするための普通のイエではなく、長期にわたって利用することを目的とした生業空間だったのだろう。一方で、その場で石器を作り他の場所に運び出す黒耀石流通の中継地という別の評価もあるのだが、「住居状遺構ブロック」における黒耀石の消費状況は、はるばるたどり着いた黒耀石の最後の姿であって、中継地といった機能は考えにくい。列島旧石器時代にどのような住まいがあった、遺跡のなかのどの場所にあったのかについて、いま一般的な答えを出すことはかなり難しい。柱穴をもつ田名向原の住居状遺構も、ブロックの内容からすると決して住まい一般の姿を代表するものではないだろう。依然、ブロックはイエ跡なのか、それとは別の石器製作場なのか、見解は対立したままである。新たな「住居状遺構」の検出と検証が、今後も推進されるべきであると同時に、住まいという観点からブロックの相互を比較研究するあたらしい方法の模索が必要である。日本旧石器学会(6/24)発表をもとに執筆。

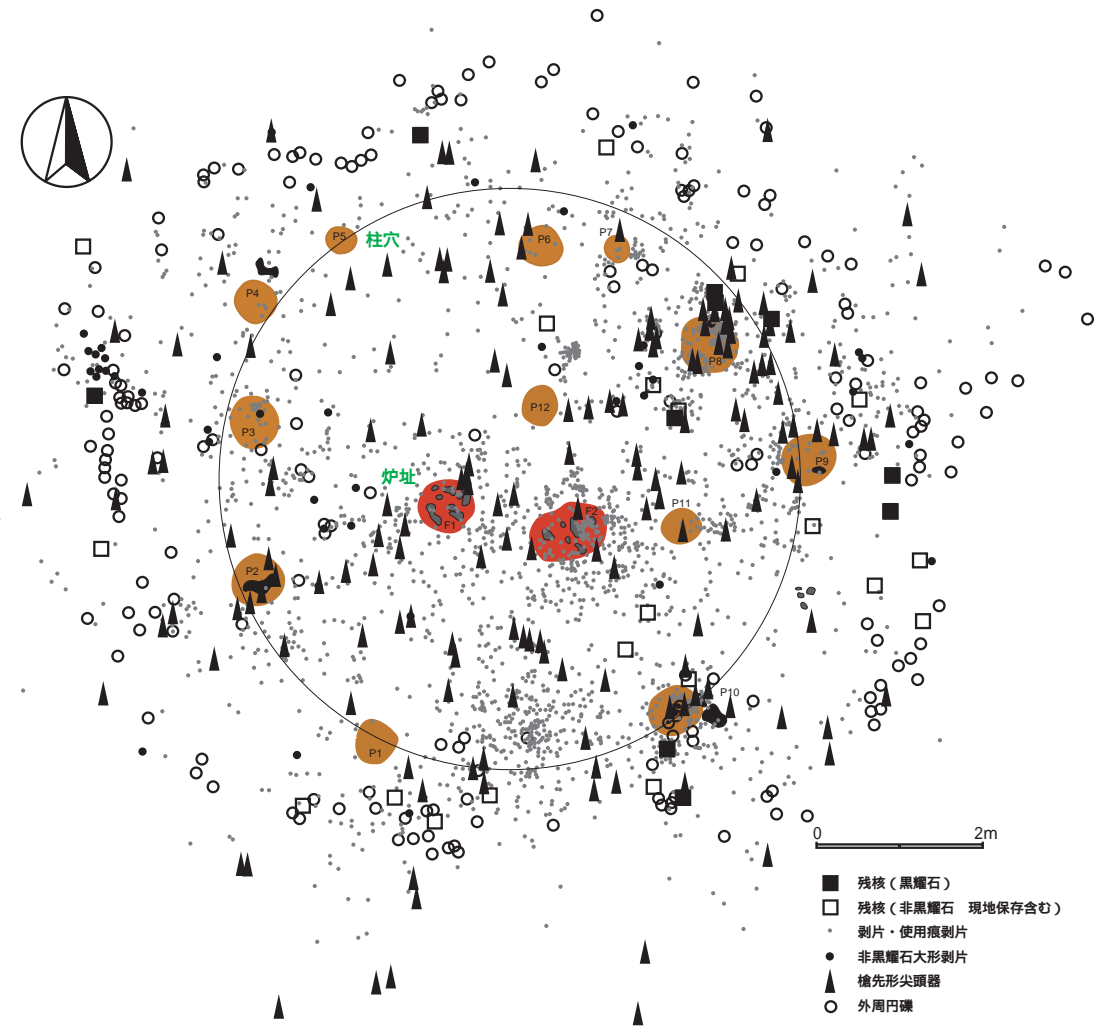


図 神奈川県相模原市田名向原遺跡No.4地点の「住居状遺構」(田名塩田遺跡群調査団編2003より作成)

# 泥面子 (Doromenko)

明治大学記念館前遺跡は1995年から1996年にかけて明治大学駿河台校舎の再開発に先駆けて発掘調査が行われました。明治大学の建つ駿河台は江戸時代初期から江戸幕府に仕えた家臣である將軍直参の旗本が住んだ武家屋敷街でした。記念館の所在していた場所には4000石の旗本の中坊氏の屋敷等がありました。この屋敷跡等からは建物跡の遺構の他に陶磁器・木製品などの生活道具・子供の玩具などが出土しています。そこで今回は、江戸時代の子供の玩具である泥面子にスポットを当ててみたいと思います。

泥面子というのは、型に粘土を入れて成形し、素焼きされた土製品です。大きさは様々ですが、おおよそ長さは3~5cm程度、厚さは1.5cm程度です。現在では表面が茶褐色ですが、塗料が付着している資料もほかの遺跡から出土していることから、当時は彩色が施されていたと思われます。

泥面子の種類は、土を入れて大黒や動物の型を抜く面摸や人物や動物などを表現した芥子面、円形の面に紋様をいれた面打などがあります。

今回、紹介する記念館前遺跡の泥面子は、写真の6点です。上段左が芥子面、上段中央・右そして下段の3点が面打になります。また、面子に施されている絵柄もいろいろあります。記念館前遺跡の泥面子には、口をへんの字につぐんだような顔が表現されているもの(上段左)、「ろ」の字(上段中央)、だるま

(上段右)「蝙蝠」に縦縞(下段左)「梅」の字、三角が三つ描かれた「三つ鱗紋」(下段右)などの文様があります。口がへんの字の顔はおそらくは仏像の吽形像で、「ろ」の字は江戸の火消し役のいろは組の2番組「ろ」組の組番号、「三つ鱗紋」は北条家由来の鱗紋であると思われます。そのほか、江戸庶民の娯楽であった歌舞伎役者の家紋や力士の名前、家紋、火消しの纏、将棋の駒の文字、漢字(地名・人名)、十二支などがあります。なかでも歌舞伎役者の家紋や火消しの纏を表現したものが比較的多く、紋様からも庶民の流行や憧れを窺い知ることができます。

泥面子の遊び方ですが、芥子面はお座敷などで指人形として遊ばれました。一方、面打は屋外での遊びで「穴(市)」、「よせ」などの遊びがあります。「穴」は地面に10cm程の深さの穴を掘り数m離れた踏み切り線から面子を投げ穴に入れば勝ち、他の面子に当たったり、穴から出たら負けという遊びで、「よせ」は地面に枝を刺し、数m離れた踏み切り線から面子を投げ、誰が一番近いか競った遊びです。今回は江戸時代のこどもの玩具と遊び方を紹介しましたが、この他にも、ままごと道具などが多数出土しています。記念館前遺跡は当時の子供の様子を私たちに教えてくれる遺跡です。今回紹介できなかった資料も導入展示として公開していますのでぜひご覧ください。

(田口慎)



## M2カタログ

ミュージアムショップ「エムツー」で販売しているグッズを紹介するこのコーナー。第10弾はトートバッグをご紹介します。

「運ぶ」「携帯する」という意味の英語「tote」に由来するトートバッグ。その名の通り、たっぷり収納できるサイズと中身を出し入れしやすい大きな口は、さまざまなモノを運ぶのに最適です。また、使わないときはコンパクトに畳めるので携帯にも便利。近年注目されているエコバッグとしてもばっちり使えます。環境にやさしいお買い物におひとついかが？



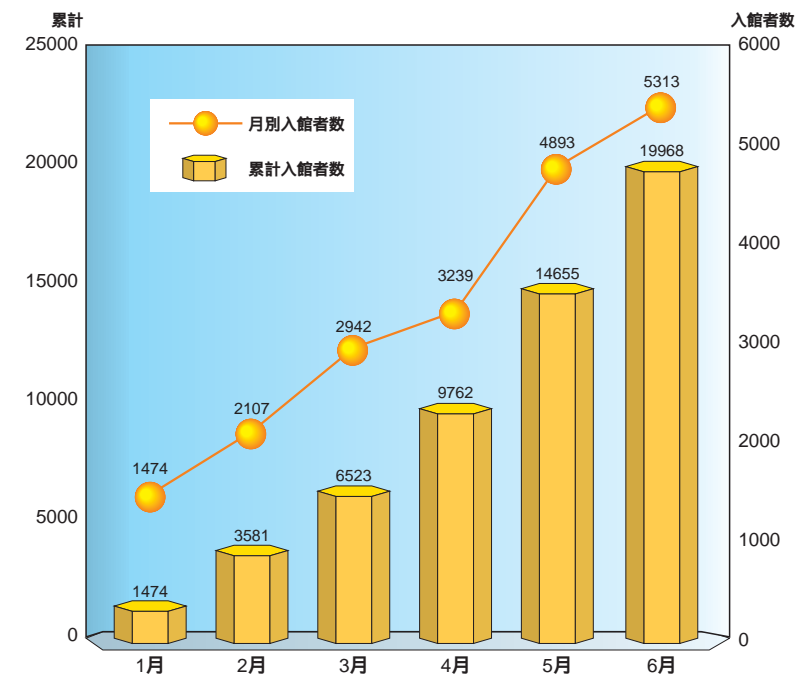
カラー：黒・ベージュ 価格：各1,700円

売り上げベスト3  
(2007年3月~6月)

- 1位 『常設展示案内ガイドブック』 800円
- 2位 カメラマン増輪キーホルダー 400円
- 3位 特別展「掘り出された<子ども>の歴史」図録 800円

## 明大博物館入館者数の動き (2007年1月~6月: 延べ人数)

2004年4月以降の総入館者累計 159,610人



常設展示室 ミュージアムショップ

1月~6月	延べ人数
図書室利用者数	1833
講座受講者数	266
黒耀石研究センター利用者数	663

特別展来館者数内訳	開催日数	来館者数
2/23~3/14 「洞窟に刻まれた末法の石経と聖像」展	20日間	590
3/17~3/30 「明治大学新収中国石刻貴重拓本展II」	14日間	565
4/7~5/7 「漆」新世紀&新収蔵資料展2007」展	31日間	1370
5/19~7/1 「ガウランド 日本考古学の父」展	44日間	3990

「ガウランド 日本考古学の父」解説風景



## 団体見学の記録 2007年3月~2007年6月

- 【一般】 マレーシア工科大学訪問団(9名)・中央大学21世紀館(仮称)に関する構想策定教学ワーキンググループ(3名)・Association of Professional Librarians Tokyo(APL)(8名)・都立小山台高校(昭和27年卒)都内歴史散歩の会(14名)・所沢市高齢者大学(10名)・NPO法人オクトマン(36名)・読売文化センター(22名)・取手市井野婦人学級(36名)・読売文化センター(69名)・コミュニティアリーナ(17名)・古代史の会(20名)・市川公民館主催講座「ぶらり下町散歩」(26名)・読売/日本テレビ文化センター八王子(10名)・足立区長門住区センター(35名)
- 【小・中学校】 栃木県那須塩原市立西那須野中学校(5名)・三重県志摩市立波切中学校(4名)・和洋国府台女子中学校(115名)・山形県中山町立中山中学校(4名)・愛知県名古屋市立神沢中学校3年生(7名)・静岡県長泉町立北中学校(4名)・板橋区立板橋第一中学校(32名)・愛知県安城市立安祥中学校(36名)
- 【高等学校】 保善高等学校(42名)・神奈川横浜立みなと総合高等学校(27名)・東京都立一橋高等学校(10名)・神奈川県立相模原総合高等学校(8名)
- 【大学・大学院・専門学校】 明治大学文学部日本史学専攻新入生(57名)・明治大学国際教育プログラム科目受講生(1名)・明治大学文学部考古学専攻新入生(55名)・埼玉学園大学(13名)・日本ジャーナリスト専門学校(5名)

## アンケートから

ミュージアムショップM2におかれた記入式アンケート「博物館への感想を聞かせてね」に寄せられた感想の一部を紹介します(2007年1月~6月)。  
ネクタイをまとめて買いたいので値下げしてください 考古部門の展示は全国的で分かりやすかった アイアンメイデン(鉄の処女)すごかったです ギロチングッズを作ってください 拷問具をみて楽しめる日本は平和なのかなぁと思いました 法律の頭を癒すマンダリン 法律のいしずえ築くお明治 ビル風に押されて入る明大へ 増輪の目一点みつめ立ち尽くす 複製品とわかってても拷問具はこわかった アイアンメイデンTシャツの復活を! ガイドブックやチラシの英語版がほしい(英文)  
来館者のみなさま、ありがとうございました。これからも、ご意見お寄せください。



## 明治大学博物館友の会20周年の歩み

「光陰矢のごとし」少年の頃、盛んに聞かされた言葉だが当時実感は伴わなかった。しかしながらこの成句を私達の明治大学博物館友の会（2004年3月迄は明治大学考古学博物館友の会、以下友の会と略す）に当てはめると創立後、来年は20周年を迎えることになる。世俗で10年一昔といわれているところからすれば二昔ということになり、まさしく時の経つ早さを実感するこの頃である。

ところで、去年の11月、友の会相談役であり、親身になって友の会の成長に期待なされておられた、明治大学考古学博物館、最後の館長小林三郎教授が亡くなられて、今年1月、明治大学アカデミーホールで「小林先生お別れの会」がもたれ、900人近い参列者により、追悼が行われたことは未だ記憶に新しく、友の会員はもとより、公私ともにお世話になった私にとっても隠しようのない衝撃で、ただただご冥福を祈るばかりである。

友の会生みの親、熊野正也先生（今年三月定年退職）が構想を練り、大学博物館の新しいあり方を模索しながら、周囲の人々を説得して、まず博物館公開講座を立ち上げられた。友の会が誕生したのはその第3回目の公開講座が終了した1988年6月25日だった。熊野先生が市川市歴史博物館長という要職を棄てて母校である明治に戻ったのは何故か、この日のできことが總てを物語っているような気がした。

創立時の友の会員は150人だったが、博物館長を始め、博物館事務長・学芸員ならびに考古学研究室の諸先生方のご協力のおかげで、今は360人ほどに増えている。友の会を強力にご支援下さる博物館初代館長は、お願いすればかなえてくださった大塚初重教授、友の会のあり方をご指導くださった二代目館長戸沢充則教授、静かに見守りながら友の会が望むところを見通された三代目館長故小林三郎教授、僅かな在任期間で十分に警咳に接し得なくて残念だった四代目館長小嶋尚教授、現在五代目館長、杉原重夫教授から着実にご指南いただいているところである。

### 友の会の目指すもの

創立当初、会員は何をなすべきかについて見当が付き、模索を重ねていた。ところが友の会顧問であられた博物館学の権威、倉田裕裕教授が、友の会会報に一文を寄せられているので、一部を省略して要点のみを示す。

「どうも、日本では参加するという、本来の意味が取り違えられているように思われます。参加する（take part in）とは、その全体を構成する部分となることで、ただ、付け加わるこ

ではないと思われま。例えば、メンバーシップ（友の会）の先進国である、アメリカでは友の会員が、博物館を物心両面から強力に援助しています。つまり、金銭的な支援、資料などの寄付、ボランティアなどへの積極的な参加など、金のある人は金を、知恵のある人は知恵を、力のある人は力を、進んで提供しようとしています。つまり、博物館を通じて地域社会に少しでも、自分の持つ余裕を還元しようという姿勢があると思います。」...以下略

私連会員はこれだ！という思いで、以後の活動方針の根幹として心がけるよう、会員に遍く伝達すべく努力しているところである。その手始めが、長い間手不足で行き届かなかった博物館図書室管理への助力であり、来館者で希望する人々への展示品解説という形で現れている。また、明治大学本館を含む大改造のための「明治大学120周年記念募金」活動にも多くの会員が参加した。このようなことで、曲がりなりにも倉田先生の意図にかなうべく努力を継続しているところである。

### 会員への褒美

では、会員はどのような果実を掴もうとしているだろうか。一つには、博物館公開講座などの受講で己の知識を深め、二つには、遺跡の見学などを通じて受講した内容を把握することで、三つ目は敬慕する先生方と接触することで疑問に答えたいだけの機会が得られることである。友の会主催講演会の記録は、無償配布されているので、熱心な会員は居ながらにして復習もできる。このようにして、生涯学習の成果が積み上がっていくのは、明治大学博物館友の会員だけに与えられる褒美ではないだろうかと思う。

来年行われる予定の20周年記念行事は、乏しい予算にしては盛りだくさんである。会員各自が所持する考古資料の展示、各種行事関連写真パネル展示、記念文集の発刊などがある。余力のある方は是非これらの行事に参加をお願いもうしあげたい。この際、倉田先生の示した意に沿う良い機会でもあるのではないだろうか。多くの会員とともに、関心のある方々のご協力を切にお願いもうしあげたい。

土屋 哲旺



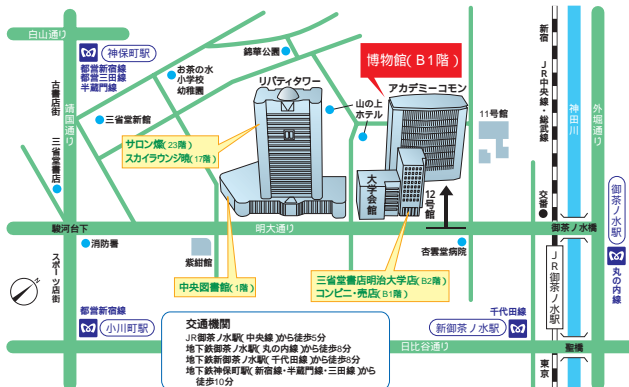
## 博物館案内

### 【博物館案内】

開館時間 10:00～16:30（入館16:00まで）  
休館日 夏期休業日（8/10～8/16）  
冬期休業日（12/26～1/7）  
8月の土・日に臨時休館があります。  
開館時間・休館日には変更場合があります。  
観覧料 常設展無料。  
特別展は有料の場合があります。

### 【図書室ご利用案内】

開室時間 月～土 10:00～16:30  
閉室日 日曜・祝日・大学が定める休日  
図書室はどなたでもご利用いただけます。  
蔵書は原則閲覧・コピーのみとなりますのでご了承ください。



編集後記：このミュージアムアイズ49号から誌面を刷新しました。これまで、春夏秋冬と年4回お届けしていましたが、春と秋の年2回発行となり、誌面は総8頁から総16頁になります。博物館ニュースや恒例の連載記事に新たに加わった「展示&リサーチ」「市民レクチャー」「学芸研究室から」では、展覧会や博物館活動にかかわる最新の学術情報を発信します。ご意見ご要望等お寄せいただければ幸いです。（しま）